

未来に向けて歩み始めた日本放射線看護学会

——第3回日本放射線看護学会学術集会に参加して——

**The Radiological Nursing Society of Japan which has begun
to walk for the future: Report on the 3rd Annual Meeting**

西沢 義子

Yoshiko NISHIZAWA

弘前大学大学院保健学研究科

Hirosaki University Graduate School of Health Sciences

第3回日本放射線看護学会学術集会は作田裕美会長（大阪市立大学大学院看護学研究科教授）のもと、平成26年9月5、6日に大阪市中央公会堂において開催されました。メインテーマは「放射線看護実践の知の集積から未来を展望する」で、2日にわたり大変充実したプログラムが組まれていました。平成24年9月に第1回学術集会在約6カ月という短い準備期間で開催されたのが、はるか遠い昔のこのように感じられました。学術集会会場は素敵な外観で、重要文化財でありながら、市民が自由に使用できる建物ということでした。また、コンサートやオペラの開催はもちろん、ヘレン・ケラー女史やガガーリン大佐、ゴルバチョフ氏もご講演を行ったという由緒ある場所です。このような素晴らしい会場で学術集会が開催できるのも、作田会長が1年以上前に会場予約のために長時間待ち並んだご苦勞の賜物です。作田会長にはこの場を借りてあらためて感謝申し上げます。

日本放射線看護学会は福島第一原子力発電所事故を契機に浮き彫りとなった放射線防護に対する適切な知識と技術を有する看護職の養成と、重要でありながら、これまであまり陽のあたらなかつた「放射線看護」を医療の進歩に見合った看護を提供するために高度化・専門化させるために、長崎大学、鹿児島大学、弘前大学関係者が中心となって創設した学会です。第1回学術集会是作田会長の言葉を用いれば“ホップ”、第2回学術集会是“ステップ”、今回の第3回学術集会是まさしく“ジャンプ”にふさわしい学術集会でした。

プログラムを概観すると、第1回、第2回学術集会にはなかつた会長講演をはじめ、特別講演2題、坂本すが氏、草間朋子氏と作田学術集会长による鼎談、シンポジウム、共催セミナー2セッション、さらに一般演題は口演33題、示説32題、合計65題、市民公開講座も開催され、第3回学術集会としてはプログラムが非常に充実し、まさしく日本放射線看護学会の“ジャンプ”にふさわしい学術集会でした。それだけ作田会長が学術集会成功のために奔走し、その結果として周囲の人々の放射線看護への関心が高まったことを示していたことがうかがわれました。参加者の中から、“他の学会よりも活気のある学会”という声が聴かれました。まさしく、日本放射線看護学会が世に羽ばたき始めたことを表現しているようで、大変嬉しかったことを鮮明に記憶しています。

会長講演は「放射線看護から放射線看護学へ—今を超える力を—」と題して、約30分の講演でした。作田会長はサービス労働についてマーシャルの理論を用いて説明し、看護もサービス労働の概念が定着してきたこと、医療サービスは一般的な他のサービスと違う面があり、サービスの観点から考えれば、患者中心の医療・

看護から顧客参加型へ転換しつつあることを強調していました。放射線看護の分野ではインターベンションエキスパートナース、がん放射線療法看護認定看護師の誕生と活躍はめざましいものがあります。しかし、未だ看護ケアの提供には施設間格差があることも事実であることを述べておりました。放射線看護サービスをコンセプトにすれば、サービスの観点から看護職は放射線診療における各種検査等のしくみを理解し、患者に対する十分な説明、いわゆる看護サービスを提供し顧客満足度を高め、リピーターをつくることが重要であることも強調していました。すなわち、放射線看護から放射線看護学へ転換していくためには学問的見地からのアプローチが必要であることを示して下さいました。第3回学術集会はまさしく、“放射線看護”から“放射線看護学”に向けて歩み始めたと言っても過言ではないでしょう。

私は学術集会初日の小山孝一先生（大阪市立大学大学院医学研究科講師）による特別講演「最新の放射線診断、特に核医学領域において」の座長を務めさせていただきました。近年の医療は放射線診断なくしては成り立たないと言われるほど医療においては欠くことのできない領域です。また、医療は日進月歩の状態で常に変化しており、患者さんへは最新の診断・治療が提供されます。患者さんにより良いケアを行うためには患者さんの最も近いところにいる看護職が最新の知識を持ちながら対応する必要があります。小山先生には医療現場で増加傾向にある核医学検査、特にFDG PET/CTにおける機序やエビデンスを中心に講演いただきました。アニメーションを用いた説明が非常にわかりやすく印象的でした。また、¹²³I-MIBGを用いたパーキンソン病の診断やレビー小体型認知症とアルツハイマー病の鑑別も容易になったことなど、核医学領域においては診断のみではなくパセドウ病の治療や骨転移の除痛を目的とした治療も行われているなどの最新情報について講演いただきました。小山先生のご講演からも、看護職の役割は会長講演にあった看護サービスの視点から説明できることを実感しました。われわれ看護職は日々進歩している核医学検査のしくみを理解したうえで看護ケア・サービスを提供していくことが求められ、そのためにも日々の研鑽が非常に重要と考えます。

懇親会は初日の夕方から同会場のレストラン「中之島倶楽部」で開催されました。特別講演講師の先生、大阪府看護協会会長様、日本放射線看護学会理事長をはじめ、会員の参加者も多く、また大阪ならではの「おわらい芸人」の登場もあり、終始賑やかに歓談できました。この懇親会の最後に学術集会への参加者が予想数を超えたという報告があり、まさに日本放射線看護学会は着実に未来に向けて歩み始めたことを実感しました。